平家物語　八

リ 甲5
1760
6

京都大學圖書

平家物語巻第八

高倉宮御事
長兵衛尉信連事
懐眼東攅男事
宮入御三井寺事
山門南都牒状事
源三位入道謀叛之事
競滝口三井寺参事
山門心替事
自三井寺擬押寄六波羅事
宮南都落事
小枝蝉折御笛事
宇治橋軍事
足利又太郎宇治河渡事

源三位入道父子自害の事　宮被討御事

平家物語巻第八

高倉宮御所[illegible]もいしいますもは
さかりのふ[illegible]はらとわせたんかりさ[illegible]
云わまんよし[illegible]なるに[illegible]
法る[illegible]しるへ[illegible]
しほん[illegible]ほよ[illegible]
小袖よりわろきをいそきして中門の中よ[illegible]
まかんさわ[illegible]いま十余町もの[illegible]

出家おほしめしけるにあんないして二人もろ
勢三百余騎にてよせしかば渋谷金王丸
友八すゝむ出族わりと力なくてはるかに門
外より入りて特士判友出羽たんかうた
ん家明けしが門の内へうちいりて申けるは若
世後の事とさせ給へさもしかるべしよきとて
子細せうもなくいりうん女房よ別当をよびて
きみ人光長出家なしわまいりてかくとはの

らうに中なごんはつきず出あひく西海へ
きは御前にくだす世する御前にてかう
まいりて義ともは金くかど申すれは
その世の女房まんこ度いかに出家なから
ていれしらにいつて殺さるにをらたちの色
ともなかきかの御前に申しまゐてかれ
まいりせし出けるに名残はつきの色
おやえぬ面をおんひいしょのれもとへかれ

家君いましそかりし三つの宮也おりふしも無ふなかり
門院内ハ入らるゝも吉姓なるまゝ三位と云
りしかまいらせ給ひしハいつれ小宰相と申ハ沙汰
かくハなにかうといふいみせよしにわ
給へるまゝ中宮の御幸の様て法勝寺の花
うるらん文だ殿中宮亮右兵衛督と号
色好の通盛といふその人いはまき三位然とて
かりき然殿おかく聞てそてなかく又海
乃ちハ年くれさせ葉すり花すそ風そ
三わたりふ井殿右京を然ときえんてかて斑
まいらす事をわすれし復便風乃三つを色
らさとさう給へんとそするところをさん
まさわたらい七八人はさり小藤わ色
うそかつなきまゝ色てうらそてうる光らか
三ゝり色よも様て番て中あるくゝさたれ
まうい門院わわけるか大とりまさまさう

ろくそさいくうらく眼をさまし又わか膝にハ
よろひそてうりけれハ毛縫をいらちすて法
両へ乱入らんとしけりける友兵五十余人
の中へ乱入てさんさんによこわりの里
多勢ハ木葉嵐ふの風よ吹まくらるゝやうに
庭へさつと散ける所に連御前大将内に
知らわし又申さりと思ひけれハわそこり
をいかそてちやうとうわこてふをいかん

ろくとさる毎乃ふ時にれしく思ひけるとのかそ
なゐ由たんたかたれとも見をハかん治て法
ちをそしれとも又わまわよう法て遊ひみ夢
近ハひさふわてさむしかりして又丈
余人さうり御帰りてわか手ハいくさのさを残
打とるかくさ二十余人とそ申えの母
法かわかへりひ法の経てもしらよ
またちりひてわるいか孫なりの経たら

こんかう四郎ゆきなりといふものゝあはれなる
ぬのかうねうひまりて長刀ぬきかまへも
法んとさかりて心得ハ眼くらきこたえんとす
てにかた紙をいさ法ようしろをさしてさ
法まこてかまてくらんかりしよ後しよりか先
なかしめ全よ七郎御す清とてうけ七
尺をうわあるたところ大力ひとの太千余
人かちのかめかうわと思えしさるま船こ

乃あり乃けなるかうりへ逃はおとしれたら
まくしらいよしらえ衆も力かちかうわけるか
一人当千の兵思紙なりしてこえ乃むまおんとく
つれたよ法文かうかり心乃のいふとむハこ三尋す
大かうかふかくも力をひうきのうちか
かかたへとんで心つり心得ハ法つらうさうし里
かうとて十文字よひうハ広を清すそ法
さかれくのゐつか太刀をさけくちやう

とわらす二乃たカをうらこせもとすせらん
てせおとらこそたんけれよりひきさみく
右乃手にて太刀をうち折りて出相たん
たうさん八気をハ見しう懸りやわ覚くす
いろん盗らるなる少中親子海なこ乃ある
元弟おとこめをそ流うとさんして出あせ
けてハたもあしやいひ乃れとまろ見んつせう
わ息く若もせすさわ乃れハ上くし上兵く

気をとら色の結とをなの身をは事の心つん
らつみ流れりよして流よくすてこわ参り
ハ上ふふつく庭よら結しよ状よ乃り乃ふ
つふあ紀さ海ふをいらう結くに弟ち申
まりりる上すへとし海ゝあ流さうして兄弟ら
さるまるこ存京弟兄弟たんさうしよハしらうさう
乃わといひわひ宮紀ハ海とふかかりける
うかはをからわ宮くすける八まさうる大

まかこふわいぬ道ハゝるゝ庵ろうしとけるる
それうしけるにつりけりさんさすいろ
手なりけれハかちもしとやたのいる小門
しわけてま出て東をさして高倉を北へ
里ふ君乃りける兵衛尉信連大事
乃手紙いうあと紙人と申りんとの兵く
紙よやとめくし里て去川くとめりかたる
孫なりつきり色よさけミりといふその様へる
里てもかさき紀みしりふこりてさ行とさ紀
なる紙乃ふ流ともす乃えふハ乃えんとしなる
信とふいらくたりのかゝんを宗んさ流しくいあ
と続よなわするから乃ふ流紙平しくえん
て六なへねくまいる宗大夫ね宗りて大
よいりて乃両つゝ宮と土佐上りけりとなく
乃ここん若るハまけなんちのもんし派
使ませハく様くの過日をうこんにあよ

訴ふるにこそ所らねならにわまつらんて
こはくせんありしをせけいはかん陽の宮ハいふに
ちんせるところなりけんをとゞへくさうの須
東京并事のめ田をらうしくめしそひく
らく状さらく此段ハ河原よ訴さ出しく
からのをた祿よとのさまいそれハのから
かまさらすわさけいてゝけるを同せ
囲をとこ花よらそくおりしまうす君の出門

此院のとのせんしきん御段を悪にし
段厳さしらを色を丹陽にしもおのかに人
毎とひ河万さちんくさん以きうなりとも一人
しくうちそうけやとしそ河つきともわ
始しの宮渡らりわへともん思ほるさわ
えんすてんしわんさんわくお渡くとてしぬるこ
うめくねこんわくひへ承せんとりし人あ花
義をさきに治らうきて一人御承よ悲しきを

いにしへる人ハ毎ことに法主不知有かう
猶くゆとも中ゆまし己乃人に入らわ
うら哉う可ひもあらん然まうをも川的は
よの老者中と中切なん一とや三うりんよ
まて中乃文於売ハ於遠沖乃事まての
君乃御よ安よ乃数つるから乃哉ん裕ら
あんこと今生乃出ん法くあハよの四吾より
とくちひとめさる乃しとうわるる哉

関ハ名ひく御果剣乃上さいふゆたりふ会
とく御果よ於きしくかうへをこさ
とそ乃うまハるる始ともちらくまいける八
弓矢ハとるらの名かん出縁しくへかくてそ
ある乃若れ乃一徒く八寂く高哉しらし
若そうし一子取而まふひるる母末死の哉れ
事ゆハうしてらりをれよおよ絶わひさとりふ
申て学ゆるかう乃ことの小くわり読哉ホ力

又ゟすして一らう二らう死せしくさは
きわひ声ゟふ乃娘つうしそ気をとゞめける
よゟ敢ハさうわ尓れハ次々に流とよるましふ
二人を見てあきれて左右君わきまへえん
く庭波肉をわいてらうを従とつゝ給へく
かすり君を乃一なわらかうえし乃持くしよ
蕗ハ又わ妬情ゆかうハそ乃次なんたけしゆしおる
ゆれ大毒氣とらかう多めか⊙く出きり由る

大和孫盛六人乃娘をもち一人としてよ
き君く人をハうらよう出そ給ん二人
をハ生とりにしてきんしやうれうし〔勧〕
谷清尉ハ毎夜よんうゟ⊙をわうたし不思し
こゝのそうしかゝる後ハよ御との御はなれ
なんとなれ娘ひんなれ気てハ君をも出さ
いくら悲しみ流しかなし思ひ出なかし
て御内にて一人つゝ参ん乃君にて

まそらんと給はらことのかみくと給ん
くしまきやうつへ座さそらへ見參さんり
わりこわへ申さきはな切らとそ給てり
給ようり後よ関えしハのかうりハ出雨
景長右馬允としてつかはす子細御着申り
をめらくして金持ら色よ座先らり給紙
平家めりかりのゝち当來依料被と思ふ
ひ面んくのゆつりハさるとの小てわんなり

さかりのことのへそ大きりなる人の給はくて
かたくふ小兆もここよ給く云文治二年り
関東へ発して下されてなをとりきすほと
まもハかんこそうとの小く当属依自筆の
かまる下文小くのとかん申大江広元号蛤
状乃かうりかへりかちうし発ろるよ申し
てその後広元んわまさ行て大かたにく
そわりあるる金文其さ座へ面んはしれ

三かなれハ京中を馳さつかるゝ人々
山名大夫すでに三條京極殿まで
なかるゝよし時えあれハ平家乃人々の右
大将以下悉く馳向ひけり
合戦とゝほうし一人もあまさすうちとり
おもてわたしこなたかつとこなりけれハ
三月まてよおもハ天狗よくわ絶よなりけれ
おほえし

十五日に高倉宮三井寺へおはしけることを聞
六波羅よりさこそなかり時分と申しに後白
河法皇にて御しませとそなんとおもひ
わつ渡辺党かくれわたましこさて出
来つ鏡八ツて高羽殿よ三月ふまし満
てよしなくも旅へ出てなるなれとそおほ
し給されけるお西にちかくしあかり
去年八月よりうたて思ひしかハ二男右大将

むすめはわかくさに暇く世日ゆきつゝき
て入道めく京へのぼり給ひしかはわれせよ
大納やくして文をかりしまいらせ給し
にありしとそれ申しける文をたゝく讃岐の
ほうよを清河京まてむかひ合ひく給
みてその根此中小紙き山へそのぼりまいし
小かるしき無ゐ浪を板もすゝつ以外瑞
ましく苗る小麦苗めしおみゝまてみせ

けさハさしそふるさくもおほしめされけれは
されハ忍わしけんなきんして流れよりも瑞
ともひつくそふくそいつ瑞ともひける所
なとみるも比叡山東谷中をはなれてよそよりわ
うち瑞青ともゆれハ出ろく世はりそてされあ
し律東谷にあまねくおはなるところく挙けるに
くしさてかの乃いとふきまつの猿をこれいより
かたとなんちへとするゝしやんと和尚し

つゝるおわかし部公乃一拶をすゝむ
えん給ふ法心乃傳よりてぞおこりし給
給ふなる

偶ある上人出家ましましけるはなる上人をかたる
聖武天皇大仏を建立ましまして給ふよ
しましけるへ一人の行基のまつりそおはし
給されたりとも、たゝかへし給ひてむかしかたり
されこそ昔るを、むかし法の縁とすゝめてみ

なき命乃おしさゝふ大仏を建て来りた
すゝめしめなりて御ゆれら給ふは大仏をとゝの
てほうりん院とかいふところよ法師まへつ
へまいりて縁くさ海てよろこひけりさるほとも
ともんこそしけるは尚ある御世とおもひて
ゆわんとあるり仰侍りすいひやうほうの
らう繇この縁ふかりといへつ色しまふ
ふへ御在其も記を人よるへ八まへ乃たい

しんら明神老翁は女ともなりしやうそ
いのちをいまにわかにはかにわかれて宰相
國ヶ浄わく流れましませすへからく佛法
ヶ龍もへきや天しも地祇もおそれしもとれ
佛力神力降伏せられましはせんやはるか
ふのらさうはわか文枡小嚴は忠へしも
いちみ老えいち南都は爰臈浄度此我
えんなりて川そうれ此所ふなんそ与力せさら

んや同心に各文より衆議一同
して山門へも南都へも牒状を送りらる次
第しとそあかるさんへりんへ可合力之由
遣牒状　其状云
牒す牒　延暦寺衙
欲殊致合力被助當寺佛法破滅状
右入道靜海恣失王法又滅佛法愁歎無極
之間去十五日夜一院第二皇子不慮之外

不足入寺號也爰号法道雖有一乃寺出之貴
望子今因之處一乃教遣友軍之旨且其國處
ゟ破滅搦處此時延暦寺若雖相分
門跡二不学是国圓頓一味敬之也譬如鳥
之二翅示似車二輪お一方闕若無其欲
者特致合力被助佛法破滅者君之主
遺恨處法以之者有法法之僉議如斯所謀遣
如件

應永四年八月廿五日　小寺主法師成賴
都維那大法師云尊
寺主大法師忠慶
上座法橋上人法泉成
如之書ふれる山門衆徒此牒状御座候
之山門乃末寺ニて当寺ニ山門ニハ鳥乃
二乃法輪之のことし車乃二輪ニ似譬ニとし
て書之際其ニ深ニ一国ニ令議して返牒

然し又南都へも遣牒状
園城寺牒　興福寺衙
請蒙殊合力被助当寺仏法破滅状
右仏法殊勝事者為守王法〻〻亦長久事
者則依仏法也然頃年以降入道前太政大
臣平清盛公浄海恣国威乱朝制付内付外成恨
成歎之間今月十五日夜一院第二皇子忽
為免不慮之難俄令入寺給爰号院宣可
奉出寺之由雖有責衆徒一向
奉惜之仍彼禅門欲入武士於当寺云王法
云仏法一時正欲破滅諸衆盍愁歎乎昔唐
会昌天子以軍兵令滅仏法之時清涼山之衆
徒合戦防之王憲猶如斯何況於謀叛八逆
之輩哉雖人之協構哉就中南都若無従之
罪被配流長吏若定深田内動非今度者何日
遂会稽之恥乎流内助仏法之破滅所返恐

逆之徒殺同心之由可足本懐危愆貪儀如
斯仍牒送如件
とそ書かゝり多徒ハ色まつりく興福寺
返牒云
興福寺牒　園城寺衙
被載来牒一紙為清盛入道静海欲滅貴
寺仏法由事
牒今月十八日牒状同十九日到来披見之処悲

喜相交如何者玉泉玉花雖立両家之宗義
金章金句同出一代之教文南京北京為如
来弟子也自寺他寺互可伏調達之魔障能
中実る若我等於外深勤慈尊之往之極念
也或公或或姑射山法文或上図講碩之母
令戦智浄儀子乞則天台法相三論共嚴為
芸一宗相承是不假哉一是次天台学徒被魔
滅之法相独為何況論外之論甲乙者則

是兄弟之評也自今之後欲蒙如右寧非
虎牢之会哉悲哉之不及也可為恥者也是二
次呉城探平朔之母携馬之教力労若弟
維東皇額披黄以為己子金万呉支従來以
不及子孫兄弟之是三次家朔者古貴武之后按
為従平其之院異安家天平御宇大野東人
雖功無前従於東征是四次弘仁御宇抜上為
軍其拂奥列甲従征孫東撫之闘陳従私九

卿貴昇三公是五次清盛入道為平氏棟梁武
家蔭恭也祖父正盛為仕官人以後之家執
諸国受領之職大藏卿為播磨為賀州之刺史
右補撿非違使是六次清理為大夫服季卿為播
應大為之前任馬尾前藏是七次親文忠盛
昇殿之時於節老少皆情達之拂擅門外
之英豪各従馬尾之織文忠然雅副青雲之
趣世人稱令怪同尾之稱情若寄得莫莅甚

家八逆次平治元右金吾信頼以謀叛之條々
上天皇感合戰之功被行不次賞之條高位
昇進兼備文武男子忠武森台財連相林
女子後宮交職或准后蒙宣君帝后子皆出
仕孫甚孫彼錫惠制行符九逆加之通領九州
不奔府貿納發金銀百斤皆為奴婢僕從一
毛遠ん前後鄉黒公標之所言逆耳雖為公
々擬之為逆於完智之義以為延君一旦之

非余欲遁所由韓非之孝萬宗臣之猶成面
展媚皇代之君遷致七孝之礼雖棄代々相
傳之家領上哉非命卷舌雖取官々相承之
庄堂保權威世言家勝之餘其驕信強從次
去年十一月延捕太上皇之捕投擇種々之
財寶押流皆陵公之非奪取國々庄堂謀逆
之其滅後在今其由我曾須行向械庄一所同
其罪十一逆犯而我於帝非意或依輝皇憲押斷

陶道光懐之首清盛入道不意起軍兵打圍一
院次二親王又之變八條三而賀哉長月權
現建異殺向持鐵鄉道者為首領利羅橋現
之變亦寧据置法不一而盡之旨明白也十三之陸
於者為命存者讒之策彰矣之歎雖不被陳
耗我寺道恩域感之情之變清盛入道寧
起兵黒欲打入者之由幽以承及兼校困
意如成与力者二月辰且起大衆同廿三日

牒送諸寺下知末寺擬欲遂素因
之處南都未参者為披一芳織救因之貴会一也
皆無改十三之次故歷家法深的之寔家尚返武則
之叉無況和漢南山無凹之危洗益於掛諒
紀之羅類般因寡左右之陈匡我豈猶全
哉之兵者綴危議牒送如件語察状莫成敍
貽之故牒

治承四年五月廿三日

都維那法師快実
権寺主大法師俊範
寺主大法師厳盛
権上座法橋上人位禄変
上座法橋上人位綱慶

九月上旬被三位入道頼政子息伊豆守仲綱
次男大夫判官兼綱三郎三位判官代頼兼
六条蔵人仲家同子息蔵人太郎仲光等よ

八ヶ国たん薫さへくたり波れ出陣はゆく
者ち波乃陣ゆれり抜き出て乃死済く御座
十七日の小法会をけし於こして高倉殿
みや三井寺へ御出あり波六条蔵人ト申人父
子そろひ大名出ましかいらうれまそうん
なしそふくわか代三位入道最期はい
子よ思つわけるともやかて法師三位入道
乃出家子よハおゝん三位たんくん代ニ八

今并源氏人右文範乃ゝ田なん小ゝわりける源
とありしやう申沙ら乃三位入道也けりく
御うらくして沖つれかと見まゐらせて候
後御子おしうありけるとも清氾し三位入道
乃ことに小宿わまことわり有る中ふ入道も娘ら
くまゐらせまうしも大事よ思ひけるみな[illegible]源
たゝ東宮ふさいおふかなましきものさらとはいふものわり
行り也家乃三等也右大将乃しめく西三

六條也かれ乃しめく承乃うゝついにら乃沖よ三
おふ乃まゐれハわかりにふ三位入道あるへし此經
まうらなと見給ひとしもこきおかふ小清弟仏やとも
有れハ入道思ひとすうていはかく此しく縁
うつハなかりつへ[illegible]下学さいさりまとうさ
いたんかゝへてちはにいたつ世ハ大将わや
出ることをさるものかれハ逆く清いふ源ん
すゝんつあらくきかかふちせらくかく出れ

とて一燈かゝげておはりけり入道お
ちゆきいふせいの見事あれハ三位入道
ハ三井寺へおちゆきしかハ宮まかりて
御ゝ見をもれ給ひけれは御ともあれは
さてハさむらひにうけとして先うけせて大将のさ
ましあれハいふに三位入道高文の御もと
まで三井寺へまいるにまいりさうけるうへ
おふゆけるハきうてん乃まるいあふれ

うてまいらしゝ先に矢をもつてのよるハ一戒毎
やとめのいふに心をかけて岩もとへさつそく入り
まいる色丈にうすきうふも様よそなり
人ともゆかれハ大将あらしるほとにくとこ
三位入道にも御さ二ハ御供の御供とも東行守
こゝおふハいつさなん一臺乃その一まへ渡辺一乃
義男也右大将ゝ次ふつハちゑんうらの通
夕出入する御ゆへしゆかへおりたれ共添うる

此わか姫もとえてさうハわれのむ孫なりせ
さりながら三位入道なるこそまことにてん
恩ふかくおもひまゐらせつるまことに
秀綱ハ三きおかしこまつて候とよろこひ申
それ大将大にいかつて先立よきんしてうらむ
て推ふしてあし前なる山まての郷へたち
しれとゝろ鹿毛なる馬のいろよく白なる色
よ紀とゝ御前て御覧ニきおふ中し前なる紀

ちゝ馬浮海ふかゝりける處見ふてこそ御遣
くれ候ふ敵より渡いれくれし天下九ヶ
かいふゝまなわれりや皆男乃国ハ遅上ま
處くれ申けれハ大将わさわひく一定
うきんけりひふゝふなわれれより乃国ハ
わかの御ゝ上をくれ申されハ天下九域
きおふ御ゝ引わ二前ゝ所ふ流る狩乃
後大将より三きおふ出わるとゝ川乃様え

候へとてひき〳〵と日の入てのちそ給
ひきさかれにも日すてに暮て入あひさかり
○給ひけるに本の下ゐよりきたるにあるか
しけ候ふ時に八条の人申かはの也て殿子
三浦郎等二階殿とりに六波羅へ給ひてく
そうしけふとし小く大将殿御門の人とゆ下
つるまと打すかたみえてとゆかけわけ大将殿の給
見とともに御前へ…きたるにこそ北条殿

よりも早行〳〵つる二三走候ほと馬か者ら
来もちよりきたるにかゝるくわしかちに八条の人
のわか八せの御子ともく殿子三浦郎等二階堂
君ともに六波羅つまゐく北条家候ほとに門の下
馬をはなちとゆかはれ参性よ…にはしり
寄せて一矢いりやとかゝれは大将のことく
りもはきたるに八寸中板给はらせいはしやうり矢
つきさきやしなひさてなわきそやれか○さらく

ことくく大田さしてそいて東近ゟ首こう
ハさるかうあらそのかく近合くてらん経
よ矢つかひさしているそのかそわんすれハ
も様とわうありしとたゝふ治女田又人をも一定
いまゝて道なんとまうしつる土道とのよへ失敗
うけそ着なは帰てとそ乃こまんハるされハふ
やまさみすとのなくて三井のうらへ乃跳ある
きあふてそまいりくへとやかれたし三位入

道ありてとうそのくこまんハ当国同像也
とふ中けるハ毎下なる敵いくさ前とし
まいりて緒あ一所ニて死なんとこそ頼て
まなくきあふふハつゝきさわけるうち中まれ
あ三位入道敵なんな流きうていまそくち
うふつゝてはせわん后さいさうくこう
さい首ハへはしハわりん用ふ大将ふ事
つゝれてきあふよそらくとも眺さるゝと思

なる程ハ追てかへさんとあるか御返事をまたれ
ハしそつ弟中将とらくふ申されハ御ハ
まいりて三ミの中将おほしめされ候ぬるにそう
もしられとそ申ける文を見るハミきおもこ
たいらの御返事をこしてまいりてハ大将殿
よりめさる候ふつるに三きおもふらくらへハもし
ミり候女乃君とかわひく畏思ふ事候ふ御心
ぬすみてハ大将殿大よ悦ふ事かわしける

るとらるか中将も御心二度まで見参せさせて
御てらつる古らる馬比恩ふかうかる御返
ふてらて候ふ殿よりまいりてかりし尚下九ら
かひらふめてれよる乃御返事を上らん
とかてハ大将殿へかけかく尚下たとは
御くれわひくて家ふくまいりてれなりされハ
ミきおもふ候君を見る候まいりて御事て他門り
候て御返事の中大将殿見てまいらんするそ

わ殿なくもろこしまふとのかへて高野山
後ハんく一向よ是川といひけり伊豆殿
のこまひけるハ一定ことのほか東下丸せハ丸
てまいらせひけり御供よきのかえさせよ
とのこまへハさうらう御供ハけりけとそ申さいてう
かりいはのこと気持かんさまひてくいかおもて
先世春着業よりて此馬庇けりける大
まいらせ思ひはいらんとか急しく急ぎせのれ

て候ふまこまひさうらいかるる大ねなれは気
ほとおろさう後かりふ御供り思つめく
身をいころまなりし所かいらふしておのう
もしさ後思ひしう菩薩尊文世ふなうしてさく
はてかをみとをまうさんまりしもとくち
かりけれとて候ふことまひけ後ハ給心も
ことれ神をしかりけるかさるてのこまひ菩
歌ハわり毛ころも口との一定ゆふまひ半なり

さん候さうらう從意仲つうふえさゝ勢よ
との〻まハ名礼ハまいら勢らんとてねさゝせ
くまいらせわく伊豆殿こまいら見参ましく
大将の稲毛なる京中第一の名高き公達
九郎とてありけるを大将よくわとの法便思し
と思ける命かもかも囲しなんまいら九代
も河殿よこうら勢ゝ重末下九世もとうとつわ
いかなる人ハ是ほとふみかうさう娘かはう

仲綱もこうむさうしハ源氏のれうと世りなさと
のわくゝ思召もなれともとしそうちかけられとも
なんまいら九代の名代わかく忍ひて東のきゝ小
む孫もわとしふかうの御さ代わてられけるま
下九世をせられけるゆうよむのこりもかゝ外
也くなそよきこ墓よゆのりゆうめしとわく
わくさふ庭のりをよなとなのとまりこそする
若大家大はなん立家人ハなそうふこさ世をゝれ

その後京中の人々見りし嘆きあへるさまに
とはせおとこを失ひし歎く所に北も孫とも
めのとか家へのほりて大将のしのひて所に
町の内にまて見つけて沖はいはなら
てあるく程に見とかめたる男ありて京へのほ
りくるそれも同し大将殿しのひて所
ちかく家の内をも見つけてしのひて近きあたり
これはかいてる所にしらせんとは大将殿

殿の所へまいりて入給ふまゝ気色を見てここに
いかにきおもいにも行くつるなんもとうあなたより
思まいらせけるに候よし申されはあへるよ
とくわれまりて火殊見りして記さまに給ひて
見ん事によみ殿もあふれ孫けりといふ更
中わり大将気殊見へ思ひてかなしさうな
せめてかうる儀よつき〳〵をきわふまていと
おそれ男殊すてゝ見まりぬへくおはり

てむま代ひりぬして申ろんとするの代と思
ふんしそわたましなれ色をうすしてね萬く
ぬしロ了まてくるう代を了禮ふるこそ臣そ
りう孫わうまと人落たちあれ倍代ハ命小
かへくてた梅くわり幽處又そう一人残とく
まりて二朝さ春るせしれく成られかう
は汝しぬしてあまにしそいとせつなれとそ
こさわ小代保えわひぬる

山門なをひ小菊殿を大衆同心にてしけれ
ばうえわり山へは大衆入道の理をめいらん僧
正法わひらうひ在くわたまき来一万石陪
来まよ神るらしし紀より八見乃こさ悪ニ宝
わひらへくみかせくふよく場之小にわせ
十郎さつむ若入らまかり来給せくふと
牒状云
興滅る若本覚一同謀叛之地滅哉依る非

寺々訴非人之訴訟ハ逆之害深更定法欲
滅佛法界之月中令叡山勅定之趣御守庶
於内称居神祇降伏悪魔耳称深想敬念於
叡山盍護一寺於一門其上以兵甲諸函護
定德通山上欲以佛之冥慮被与護衛也一の
近院宣之趣状如斯仍言上如件
治承四年五月廿五日　左少弁行隆奉
謹上　山座主御房

とて書たりけるを見て座主是をさん
しまいらく衆徒に披露せしめしまひ
けれハ山門いよ／＼よりつきそわりけり山門
にハ是しあれハ當部大衆座主經一巻
實語教一巻作之根本中堂ニ送畢
欲心貪著如説經
爾時座主三千人其大衆よつきくろまハ
くわんちうよくきけよくこれ受思念せよ

わかまゝ一万石おりの人へこゝにちよ八
大師ちん君よといそわひてもわひらき記
らの也我かまゝすろく恭絹未をん師り
わうんとおりふてし大師恭御りをいて
いうんさゝすふゝて云我今日よをいて大利
をゆて心大よかん記なきなとして孫らく
ち記まうの永をと記ゝ為へと記ふさすを
こゝてのきまりくせんちうこみもの大師

よより記まるゝ眼うきをしへのとゝまう八
我かんまて小満し師恭の乃きこ又らん然
うの母大しゆをりのらく三升寺の大
師よより記恭心をきり後ふさすのおく
の絹未をりて大師小与児説言
俺山は如衣わりや茉まわりやれるきこい
わくきるのやうはく

實語教一巻

山たかきか故よ貴からす　樹あるをもつて貴しとす

人こえたるか故に貴からす　智恵あるをもつて貴しとす

とみハ一生のたから　身終れハ則ともに滅ふ

ちゑハこれ万代乃宝　命おハれハすなハち随ふ

倉内の財ハくつる事あり　身の内の才ハ朽ることなし

よくハ一生やふれちら　智なきをもつて愚人とす

四大日々よおとろへて　こたう夜々にくらし

かるかゆゑよ書を読てうむ事なかれ　学文をおこたる事なかれ

孫ありそのうへに聡明を好　うへを思ひて孫をうやまふ

四書五経よ心をよせ　海ふくれんちを深し

師にわかれ以ても師を　弟子よわかれて以ても

師匠よ互に孝なし　本ふりにもならん

父母の孫に向てはいと　なをもちて心よおなし

男ハかりそめにも　妻子よそへてわかる事

こまかに学文乃　金銀をもて忌みたる

一家佛法を若乃うちハ　一文不通乃くせなり

二 文まつりの名付くハ
三 弁乃妙なる今を境にて
四海よく治まる一統の御代
又ものよ治まるわたりの人
六分ひとりのすくいにて
七仏の外にも成りてこそ
八宗の名をまもりてこそ
九重のうちをする何

二 かくはかる世なし
三 流の原をなす弘法
四 ちゆうきんを尽くす所
又 広大なりし御代
六 かたよらじ流れの末
七 座法会へまいる道
八 海にも孫をそて行く
公卿ぜんさまより学

十 根法を小車にて
百姓をにして拙をとる
優なる楽器のあそび
随余項礼法将軍
生々世々につたへる人
又 ねりわたりあまする二百
出現しなりぬへ衣うつして
出現しみよりの法の人の八

十方世界よりあつまる
千億法をつくせしの庭
勝徳一念あむしだ
今日より我らを救ひて
在々所々より結縁
弘法大師の八十八ヶ所
よりあつまりてかく道

繁洛中にこもりて乃くこもりわさありけれ、
尾さつけにも蒲生にこもり乃けうんを八
みそ大厄とそなりしかはここ然ゆもわかさり
ける山階たんよみかりけるとかや
抑り此八幡一きをも元然男て大かも脳かし数よ学
源三位入道山門とみ答さありけるにも残けるく
くるそのさになる
ささきこる様孫男今此の尺うきうふとのの末のわしは

主上は又は大波入道の御所へ八條
八幡宮なる新院同しるきよりて殊へ御ふ
同輿にてくわしくもあれとも御乃さてことに
まて及たすとの御よさはなくてうめえし
御こし居る後よ八軍兵数あまさりかこ
みくはなり
後圓融院御宇永徳元年十二月八日やかて
かしこ安社よ将軍乃同おん志るうるれわく

とうさんらくすゐしと定めけるにて旅
むかしのうちより弓箭をさいして軍兵
三十よきさおひして御めし大坂表へ
のちんにおしをこそ万人か城をとりかこ
いかまよまゝ六小金ぬけ幕府はるよ八
流石との前後よ仕うわきやし地同丈三百余
三浦入道粗設るより六ちうへをしよせて
大坂入道を攻うちよせんとしよくしける

越後ふち城引うして如意かなり一手の人
ハりぬくくよ流ハ松を皆わけてわけるほと
かくさうり川右大将仰へさうし流かりして火
をうけさせんよ六波羅よりえ向りおそれ武
者とも軍城まれ緑まてく馳むかハく矢先を
いさ協く岩坂桜下よ見さおりて戦場
よ北条の兵又百人ハくわさうしちり居て六
ちうへ入て風上より火城うちくく入道を

うえんとさういわるへしとよりある所儀
なるあし山門寺大衆もいかりけりし
てくわんを没南都乃大衆もおこつてやり
ともいまさみをも山門をうらみしと皆々
うして奥州をなかくし乃れハ世らさうり
大衆ちつ向してせんこゑをゆよ大政へ
天台いのちの師一如房阿しや梨真海才
子国寺へ於来人行そしてせんきの座り

すみいそくゆかるハかゝるよしもきこえ相国乃
かんとう名おわりし光されとらん安ねへ方
人かくのへ門せ紀乃花とひひ我ゝ乃ゑ
ちといひいつくかとんとの中をはなれまいら
豬しへき又歌あるか旅ぼをしまそへしも文
菅原平安家在京乃つれさかくゑかいり
威せいをわろひけんとも也未より八源
氏の世のほうをさりてうしめいつ又けんのせ

さて然今ハ大政入道一天四海をしめこ
しろしめされけりと威くなきに御姫草木まて
志内にかなはさらんハなりき海を見る小こゝろを
く小物とかりて思ひくらへこそふかわりも征服
蛇蝎をふなひ蟷螂車をふりの色すといふ
ことわれハすは纔にハしるまゝしかれともなく
なき勢をもめに御しらてそうりつきは
もかハ先なくして抜目れさるわか人々文小

てかの心根を源さんとて長さん文をすて
まそうたん落居ふかしや禁あいこう衣志
色うそくまかしらつみく大なるちから
さうしてすまん共にくやなるハ世うことをゆゑ
内心色もまわん成就ちれなみん清
見原天皇大とう北望子よとうハ様々花
神出を出うけ始めて色ものまうみ難
都を立てさけ始めハつるかハ上下十七ま歳とて

うち蕃に酒のみける後藤実後藤をぬくかんのおはり
の輩をめしはしてみのとわふかんとのさら
丹波といふところを過て大きなる
みとせうひ給ふよ地の河くれ出てか
まへうりけわそれよりして出河を過無河
とも也さそてつねふいくさふからくおひたり
ことそやつてくる驚ゑふところよ金きん
志ん思んわされ娘をわりやいふおん文わり

あらしけなくも文出るをこのこまひらく
入をおりしまし色んはいうく力わそ
輩酒いし輩さまん文余ハ出るもし言ハ志
うち丹子六はらよりうち入て太政入道
らひとりくまいりをはやしけるおほせん
院の大輔といふわく深をみ出てやける
ねせん記をしおほし志りる紙文月のみし
うち秋よ母こくなきしうつるふさらはかく

うち立ごとく二手に今川殿義元ハ浅三
河入道より海道せうぢん尾張の国桶狭
いそう御ぢんほうりんせんち桶の井子き
あうせん忠いしらゆよりしてよ十騎を以
三くして来らいる敵あとおもく千余人
もくはつね松をしてしらぬへむかひ前
里六ちらかんをふハ信長大輔
井子わうさき里うしやう信目いんか井子

佐川殿やんゆん院の大輔氏ら三人たう
ち桶ちくもら矢わりくも一人とうりあわ
く後より手勢にてハいなその見川しや
わら大丈松井ハ肥後守みの六郎殿ま
ろ鴻のわしやまハ浅よハ金をうにて
六天く立てた坂大輔の首かいさて肥後か
なり立うしき浅を思さと浅くね浅川
やはり宗紫わく古納てかれちくせん南

勝院若肥後阿闍梨定雲四郎房大弐阿闍梨定
俊中院乃ゆらま七うやん房乃阿しや里
房六十人ぞ中かゞ先途ん郎房一条流
作をうすみれする流ひとのかくわうる
雲衆は八流ねぞ去うゆめいしめん小舎
葛月葛葉慈愛楽住がをこれし流王房武
士は八坊ぞちる仲間流右史判友り孫流師
六条慈人仲成慈人右郎わさかへのさうく

ぞわ彼乃次郎さはくさゆまの岩清流れ
流たさおふかんこきくちわこふ右馬允長
七とをふちうしすむぞをし先こしく
七百余人六をゝへとてむかひかわ如意岳
乃みねに進くしゆわそ乃あれ比叡る入法
若後八大衆小衆とゆりさうり流の紅せ
起さうりゆ道をさうりまうり乃草わしわ
うしなとする渡とふ附刻ぞしうかけく

栄雅君ゆとより鳴れへ里沖深中ある上
八月末みしか夜に移ハ夜すてよわかる
んとも世縁わくあ縁と川ことを夜
うらしそよりつれ同津れかのふもし
こくさのく海へ寒へとやみ八恋へ年も
院乃太補きとみ出くやける寒朝に三
百六十箇国乃地也かりのんにくたん稲穿
とく浅衣付くくきうしやう君とへふい端

ねこふすに孫くミ子人を朝夕よ思し
清からく色栖ふけい忠いを母たん気の雲
上ちんかるまねりことなみ姫すてうかんを娘ん
教すん君ろし里とも分くくせもとかあ
まい世ふすに孫うかこくくさうとかふも　狐白裘
のせとうしそうらん忘さうたくねうりける　孟嘗君
浅六ん君照王此事浅常へまんひて伝ねれ
こちく裘我ふ治さ蜂ととの給ましへれい

歳月までいて八十一の女ありと思けれとも
みな我わ人をハ承引ひなきと思ふてこう
在中将よわりつふする所ら友康よおさ名く
なわしる我かうしやう君をこうりてこそハ
むるわいこ八ミやくよ志よせうる逢しとて
こらま個よてうて犯と婚るかうしやう君
かの髪をうしかひなると遂すうる然
ことふ思ふ日別居志よくしや逢なく髪

おし犯と我顔なわ性人心ならの道ありふ
てさ海く出し能あるとの我ありしにうかんなわ
ある女ハ小儿角のなくまゑをするこのとあ
里ほるむ色大者ほし家まゑ出るとのまお
里わる女ハ然てもみよ出しするとのまわりし此
中ふ李丈丁といふとの然てもみよ出せり
女へ抓白髪然すこおしくまきんやい
むかれハ又うしてうらん大よ悦てくまふ

下にはらひすまし照玉のかゝりけり
くほう苑をまうなく，かうしらく，か荘厳
をおすに出くとうし〳〵ち君〔?〕ける敬
てうてこと躰りおるうへれ志けうくと
御す所破御うくすとそ三かへ花か
を引かしておらく出るよ金剛山龍鎮山
竹葉山明呂山拾願山なとゝいふ所〳〵にて
たゝふ峯すて小大七ケ度よ及ところ

とくしくうら勝くにかをめほとり今
以牛山をうらうこく函谷関よかう孟嘗君
又わが身一夜来戸破八函谷関といふ
是八月救をこそり爲勝陀羅尼を誦せ
るこの世は忽にさとくにかをも関せしけり
かくおん中に尊勝といふ流れこのおり文武
二人の武者也尊勝陀羅尼を七遍となへ宇
里のれは鑠をよろしくさけとゆき給へ

第二巻樂戸にはれちうしんむくちう夫せ
こいしくハと残さる毎国あり色もしまに（摩尼）
ほう（寶）くゎん（冠）志国といふ女いのちありて
いふところわり尼教小もろもろの経あるにも
六やり又その身巻力に八千二百人
うかせりうしやう君らに巻ちう杖かく
ちうをとりわけ次々大路に入て色ハ八
万尼教巻をことかうしていなつきて第九

従よほうくゎんよむかひいく生死三界輪
修行十方界平等東南西北
朋云敏来尼慈してかなる所行にてかよ
もて開かんとをとりつのいふ開きりに
こころ云ら第をつょくまつもう杖
せりくして猶をとこるもとあるよせよそては
通へうすといふたいちなうさうへて云
我すみハら西従よわうす九品くゎん従

世然しくなるところを一めん大乱なり
然るところに尊敬たんたこ一なりしをみなもと
て関東には天下わされハ大地震の一定
し関東わらしとてわたんとて天下を関お
むさむらくとうけと称る根乃役をつかう
を諸常ならかくのことく藝能一流ある
官に皆是また此たんよ多くたんまる夜まつり
その中に文武二道わもうけかしはさ一定

水草乃にしまかれとも大舎大海なれさ
挟ともなれとつ天下きくして合戦ゆう
ては敵一人たんをかけんといさみあらま
ここに余人よこえて重傷ちまみくに
とくろうしるとのあまたなしその居を
鶏鳴といふ芸能第一流以人也文武人
の威をうしなへ数かの世さ沈をわろうさ
人ともに此八ヶ度乃ろてかいふわへくいその

道なし然しそれとも此函谷なりとハ今
君もふかくめしつれし居ところにんよりの
鳴聲をまねる者ありける然るにまね
りけれハ其を諸共にして然しけれハ通り
もてよ中月三大夜城戸かんこく関といふ
よりうるといふ鶏なん鳴さる所に城戸をひら
かさる関なりしに今ハいかのおもり升井ん
こゝろえしめ也四方のにえとりいそぎて鳴と

如関此戸さゝらにおさりしかハいりかたしといへん也道
嘗君欲くうついまゝにれよそぐ就なん也
脈をわかりし鳴その時鶏鳴みなかきなん法
をうらしてかこき礼ミまいる儀をお後り
はてうかゞはすまた忠よかりり韓鷺本也
いふなかり茶乃枝よ此あわわ例く水中
全成親し関をりうて然んよわあんと杯ゆふ
心をつめく烏帽子をかうむりそふみくよりも

鳴聲をしかり候道ハ四方にゆんゐるうあ
りしたらくと鳴らくはせんとう函関
孟嘗君よわる金をもつに鶏うけれて
こゑ鳴かるゝを人にわすんとていそ紀ども
あけてをめうしてう兵悦をなしてなり
とうら通ると鶏鳴にあたれはくさ成うこ
り中天よりあまく水下をかしり屋道ハいふ
安わるゝ故也関守いうふに私をなりうゆゐゝく

鶏鳴ゆゑにおちこちにわたるの函関とりかへ
あさそて張陽をふ洞也嘗君をふうくし安
関けうとうさ◯くと渡るとわうは関守
こそすといひ物かんの道うりとて天を
よく酒かりく関守ども城きうしかる事こうに
友牢近うあくとうう志うらんをうらゆく
あんとす其道とも関守どもをもうさうる
抜れわくるを酒かうふけるうりうらのひ

くゑ尊君南庭にたち紙乃上よ何か
見すれハ鶏鳴の儀なりされハ人を
いさめてこの御ありし花族なりとも貴すへかり
けりとおもひまして命を奉ふるこそ此よ
まつ見よ者りんや上古より合戦乃うち
われ見りしも御ふとしもの後ハ一如房か
はりこころ小関ありきにはより起鳴きつらん
秋をありてまよ馬をなるまよへ何ありしとて

者とよ出仕とりしも世をやく此とや蓋れと
を秋ほとて明よわせよ又後ハ見ハ一如房
か長命議をなしまとさなりとて加茂場へ
をしせてまりはゆひ一如房か并手を
もおもひらひるなはと小闕しまく
おほくうるに從よるり何思案なくて六を
らへ明をみひて化しをうつへ筵六うら
よハをとうりなをわへまりうりなる將呑れ

はおほきさはりしも文応出忠大臣兵衛督は
かくて七らくりつる御悩重く御門
兵衛督せさせ給ひけれは幸ひありてはなやかし
とて大臣国篤綴へうつむらせて置はあり
その後小金堂より御入堂ありし文治元年
世尊寺なりしとて二の御覚せられさせ給ひ
けりけり蝶なりし孫勅り奉らせ給ふ北派
光院為相院法印二条○式部安房去

の御門よりうつしまいらせ給ひけれはその御返状
也おほしくて漢竹一をまいらせ給ひけり
院秘蔵しおほしめされて二井ちれほり
是ん院僧正覚証よ御さくらん此上より立く
七日おもわりくほう世羅れけり御笛
なりおほら萬歳御秘よはとり出されて次
御覧なれわりけるに為松中納言実宰宗相
くゐれけり萬歳に御秘をそへて通のやう

に思ふくおさめしらふときゝて又えむく被
らんやしきされたる道ハ笛のあとなくや思ひらん
えまうしくおもひしてせみをれありく
なり希代さんの殊らく御笛のさよさうんや
さよましして後御笛をハ蝉おれと名付
られたり高倉宮へさんけんよもしく
ゆつり参らせ給ひけるらん讃文流笛の上手
小さくゆつり参らせ給ひけれハ後白河法皇よ

里給らせ給ひける比御物こ兄として高倉
さんありおんかされたりしとき龍笛
此笛遇のこめしやおほしめしけん後秋
万秋楽をわうきされく後鳥羽院をおもみ
ろくよ参らせ給ひけりその後ある雲客
同告へまうて秋ひんよ下向し首のよ
三井寺よ御笛のありけれハ法住寺
やましくさうなれハ故文居蝉折居

昔は寺なくして本尊ばかり残りければ金堂
観修寺殿河内国そのよしの縁ばかり見
させ給ひけるに其御絵をみれいて
てらの縁起ありける遊しまた寺おこりける
人の躰大疵付生をすてゝ此御絵をおくらる
ふしぎなるものとなりはてそのはかり
はじめて一和尚大師よりおくられて寳堂
るの寳物其の一なりいまよりあるとや

京園は河内国大のゆかりの枝よりすけ
すみあらく中宮は八幡へかよひ
そらしきみを吉と思ひて御心とゝよ
光国いり給ひし色よ此君子親房に
ゆへ出しとき法師にさなみの本尊後
人山内すゞうり新部忠としみちを中
着の子息文を平清ちらんの後より
ゆかり継にて又條河原にてうつし然

みなし子にて候しかれを犯人弟ハいゐん
か給ひてとらりけりそうて候へハ心のまゝ
かとよく知く候也にて犯人徒弟まて
候御身をたなることを給ひて北海か酒いま
て御心おほしめしなされんとめしくをは勢
ましくよて海をなりし命ハ文気を
御らんしていけなりしみいけなん也いゐん
早もなる犯まいふしくもくハ思へハる御人

とおほしめすに御渡りはなかりけり
御方にハ三位入道なんと渡部并るおく諸は
兵都合三百余騎にて醍醐路より南都へ
をもむかせ給ひけるか御馬よりおちこさせ給
ひけり宮ハ宇治と寺との間にて六度まて御
落馬ありけり世の人桃尻とかや申ける是ハ
御心もなくてねさせ給はさりけるゆへとて
こそとて宇治橋を中三間ハかりひきはなし

はやく平家院よりのうけたまはりて御座す
みかた平家の勢をさそく軍兵をさしつかはさる
けしてきを追伐をうけ承別
大将軍宗盛　若狭守経俊朝臣
権亮少将維盛　新中将資盛朝臣
左馬頭行盛　中宮亮通盛
参河守知度　本三位中将清経朝臣
御よハかつされ介して清房こそあひたりけれ
海内ちやまつる房こそかゝ守度うけいつか

ちんたこえてつゐむをしれ三郎兵衛尉あり
らかい以上三万余騎未たこ山をとをかりて
て平家院へうむひかるらんとおもふすて小
雲霞のこと（く）にて池来といふ海をさそ
平家院よりこれありとみえなれんむまた
そうなかへくはかせつゝるとこ度なり
三位入道の思ひけることこれなか
さはみす三百余騎かくはやく平家

の出まで月さしなまけして清水へおはし陸
らけ給へと三百余騎を揃へ小くにむかひ上
へ下すしみなる文の御方よ三条なるおく
落つぬれ共ぬいかにといふその日門
御所つよゆるされたるこの橋の上ぬしへそ
もんなれぬいしめんと御もく紫ちら
褐衣をきたるいろて後よろうをせとぬお
らせんのまつりいはらうれぬきや大太刀さし

かしらつゝみをいたして世曲しけるころなり
のちもら三尺あまりの太刀に金まきなしたり
きや入くさけんいてりこまい甲ぬきひよふし
このもかとりもちてかけすゝる たる馬のふ
そくうましき不思そうをこそて案ひり
同宿六余人皆おなしく女房褐衣のはかま
よろうをせうしみまつりいたしわつる九条人
同思ひまいらせとしのちゝうちまちて橋のうへおはせ

むかひけるを見てさうしける世にある者にて
なかにも大衆よりまさりたる筒井の浄妙
めうしうは常人とて器量するまいかくもなし我
とたゝかへ人々は明後よむ人々ととてむかへる
播磨をさそへてまほんかり時分弓をさ
ける矢にて敵十二人いころして十一人に
手負をさせ矢一つたえて後は明後矢
をさうしてつゝしてけるは箙をはとき

いくさはけふをかきりそれは思ひさためそ我
矢をいらて敵の矢を射てそよいてられて
八幡播磨頭もなくしてとも刀をぬき播磨の大
うちかはしめいしもんかいのち浄すて播磨頭ある
ましはれんと思ひんとはいのちつくさと
いふまゝに馬よりとひおりてちをかきとはなす
てかわわ播磨といふとみるとしつよえひろ猪
とも抜て待ちかまへてこの身をもかきやおちて

なきわさよりいくさんといふ弟宮神をゆり
わか婦く甲の志ところにてこ弟く橋あかめ
なることにありて里わる重藤三百騎の中へ向
かけ入よなり人先一條二條の大路をとをし
るまりもなきやとく力なる重なる余人に
とうりて一人もうちもらさりけるなり生捕す
七条よなりける一来の姉のすこしもとる
そうる重よ弟るゐとより氏らいつ弟るるめ太刀を

弟ふをり御りと氏らいふ様八とりてとむかる
まの宮なりしされとも八人なる死に姫九人
空いふよ長刀わぬ然死せきはよりおきとよ
なり尾りて太刀を出きてうひなる太刀
出て四人きり姫をめ人といふよわまりよう
志りくむかいあひくるかる死者ふをみまゐ
かう氏ほよくうらつ重なるほとふ月塩この
かとよりおりくく太刀八河へさ刑と入いまい

うちとしつゑこうてかんつりなき志ろく
氣つよく力は清のふちからかへくにたまふ
してうちこりけるうしろなる一条次郎か
いしやんのはさまり清と申く前より立さりて
そ婦せ紀けるかいしやんうこそしとて三浦八
たち郎さるわさなく居たりくさ川く競
流くわうふさよしすくむはかりて
一文字名のりして其二人かにかりみ其

めいしやん色らはうしろよりまはりて法住寺こ
百余騎ちんに勝とうてかゝりける三十余騎は大
君めいしやん一人してうちかへ余騎八段
きまりうきけるか平家の大勢色をとりてうん
ちんに村手乃ひくしそうんかりけれは近衛
よとて我もくと橋の上へそ押かゝりけるこゝに
はもちこきのよするかわやまとすかいふ舎
す二百余騎我さ記すにうちよするわいて河労

いらてこらかわかれハ後ちん大将よりさまを
くえ陣二百余騎からおしさろくなりまし小
かり燃もさ挑よめいしめんハろこ紀二人そと
里小して大手乃五條いくかさとは
里海く平馬院のうしろにそとの御所さ
とさそておりあへる矢滝かう人くく見え八六
二すら大手此五八ツ取りもてハ寸をし次
此いくさを見まもかなり色しとも出へとて

ある夜ららさそておしららゆひくららこそありさく
陪えよつ紀ろ東をに海源御ともふくなりれ
方へ明よかりけるなく薫大四人か中よ二人
ねらころもとぬ十人ねいろそてをいろこりねらす
手をいくみんなあれしてらひともひさけく
しそけりき海くりけるわつさ乃命らて清
うらそ乃もんちん小くはしのよへむらんから
けまとともめいしめん一人くらて亦小武八うしまゐる

いとうらおとされぬ程わ川に二百騎ばかりよ
なりて河海同志のあつく陣大矢先陣定さ
ちま居は平家ちんやんちんむさ返をとべく
くろうをおとしのよわいを忘三人ゑすの太刀
先陣の蔵者とくなる矢梢くはしのう人を
たしまわつきてくおりしろく太刀をやりてそ
をよりなる半気ぬつしま矢さ紀をそろへて
気をいるさる矢をハをとま数あるる矢をハ

さしう川梅さそくうらおとしむつひくくる矢紙
ハさりおとせよこふなる矢をもこさりなれハ
陣居ほとふ二百三十すりまてう切さりなる
むらふ騎十余人へさわころをうましまして
う矢さり陣定れてちま居とハいまとなる
気ある三井寺男一の大矢をいなく従ともあ
わなうなりなれハその同ある矢をハうしこ筋り
うら抱えくハ一毒此まさう也三郎の愚ん

住人吉田安房右馬允かまた原乃平三かけ
三郎以下二百余騎にておしよせけるまに三
郎はよろう宇治いさ騎にて引よりて案内
軍をいたし宇治かるゝれ水乃流れにふかふこ瀬あり
尾くらうゐて軍なる橋あ上をまゐりける
ゆうし里海とのまわりよりたへよこみくて八お海
し河事をくいきこもなさ八わらし橋をこ百
むきさうりなる陣をおさへ後ちへ急駿よせさ

せくる陣二百余騎又河へ入にかりあらそれ
よろいはをくれかゝさせるしれ宇治河に浮かり
かれは風あふ事ふをいましに吹ちらしける
よ似たりけるそ乃中に浄縁ゑ住人左馬田
四郎忠ふ飯田六郎真康同十郎兵衛黒田
後平次已上三騎さいさ程く火おとしわ
せけし乃よろいむしや河になかれてうきしぬ
しつゝ然して細代になるものかれてちれく

また浪荒れて夜は猿らなくされよりつゞて
浮かりそのときに浪入るかくぞや申ける
御縁むしやハみ字とそみえハほそくらみれわかよふ
忠清むき浪くかゝり里乃てよ申ける是今
日暮れてわらをしそいとふるきしとおそく
浪は日に出河を見てハ又月夜れにしてそしふ
水そやく浪へハ橋よりうつてもつてるし
ともあ月くらすきてそもわらへきとしる

みえらすさ道ハとてむま浪を眺めてる夢
ら浪に子す小も及す浪につ社座て秋に入
そ色より下るこ忠浪乃方へ人を流らって
瀬山を揚き屋く寺の小明月河を見ゆる
色父文ことわ人内をもて浪いとわつ仏閣
諸方ら浪廻色父りとやけ道ハ数万人忠清
そこの仲小お申しのなさりのね小志りの夢れ
我従人わしかく乃父をきつ眼といふすの

すみ出くわし程三総夜なり然よと申されれ
彼らのみ子供何れを以き水らこれ下なれ程
絵ともさらに水ハ兎まし河は彼ぞして御座
て道これとてめぐりあるかるこ記なるこそ有る
左ぞ文やう色ハわる言葉いくさ君乃ひたし記
しるて浪ハさんなるとの我龍神なる法師三
百余騎君大勢ふて文君御出へとまいり
よし答ゆるさ記小勢をつ第くなかのせん合

色月数れふといなる係ふて何れいていさ
勝負を決せ我色御沙汰いしわるゐ世ハ度去
天ちくろつれとの我めして八うとりさされし
なきハ後よハをふのくちわ甲斐そしそ是らく
是程昔ら数わかめしりを遠て数々合戦
みしかふむさしと上野との堺ふとて
とふ大河わり合戦ならふよする程ハ浪
を渡りけるさてとも打ける係をが浪もとら

ツす渡なり人をなやミ渡馬をしかせわたる毎
わしかゝりきち給へりし時上野新田入道を
将くかゝり先手をしとさは大手ハ長澤か渡
を世搦手ハ古我将監にて東とふとすを
けさんとすましハちゝ海かゝしまて又百余艘
舟渡海河原より引わかれ続て新田にかゝり氏
搦さりしふ人よ毎に月まて今日めくさの
かし先手ふよするとのかゝ北よ無をてまし

こ続てとくこゝに乱入てくわるとのなかハ危り
かりして分りと思召されん處にらちもし
つる舟しかたる○ハ庭見みえ列にならせとも
若殊ハ供河よならす揚やとく又百余騎か揚
ふく馬いさし浅洗ならくにてしてその日めく
さふハからふに帯り河守ハ新田をかへさ揚はて
けふして先供河をみふにはしまう
色のなかれ杯を弁めしよりしまします

ゆしいさわさかん殿原たちおなしく若党
ともわれもと一意乃ともからには小野寺
せんし太郎吉水文郎戸矢子七郎花乃
子太郎佐貫広綱四郎大胡大室深
栖山上那和太郎郎等には金子丹次郎大
類太郎利根四郎薗田四郎田井右京、
大鏡兜八長里宇六郎うふかた次郎をはし
めとして郎等七十余騎郎等二百余騎也

これ等なへてさ河をわたさんとすかむ
かひ岸にはしまうし三位入道たゝ二百余騎矢
さきをそろへて待かけたりいさ騎等
よはきをかはすうなかけゝるは流れ馬をは
うは手よりてよはき馬をは下てにそ
よかうさせなへ手綱をくれてさしたる
むま尻よりは弓筈をさしのへて乗
らたすけ弓と騎よわまうこうり弓一ふして

むまれわの及えん雨を八日つゞけもくう
てわゆきをよ馬れわしのさゝ雨を八日川
なかく流て、おそろしき橋よかしらわたりまへ
橋よかゝり流かしら出川ま出ゝ出川をふるわ
さり流うちてれわかゝる流つゞくふ流水よハ
おほくるよハすく眺くかゝる風しも絶ゆ
みなわたる橋よされたとて比叡川くる峰
小くらきし動くなかふとのしころ流る

ふかきところこゝかすこしてまた風んいさゝす眺
村むらかあん神流まつかりよわそよ水ハさゝや
しろこ八条一丈字よなりてしそ水よ志字ひ
くゞ六ゑんおもゝくハさう流馬に流ひくゞさ
和よらをかれゆる眺ちゝせやく散るまて
三百余騎一騎となる便橋より下又六條
えりさうりてもくえんきうしまされとつ盛
てうちわたりわふかき淵なり弓杖つきてくむ

まこと氣つよく志はらく松乃奥のまうえ
しらかさすさるほとふ秋も須のくやあ
りふりり思ひ綴もくらんら君遊室よ見せ
とゝれまりいかゝおもうこゝろ我いそうかのふうら
うるよう二とくこうらうる志う思れりふやもぬく
見よきこなりしてく後なる君須ろなり年大
仲らられ大空うしうる依矢うしらくこうふ
おひなしてさけとうれうる君まけれてまん

やんわし毛なるむまの尤すよろつこ婦とく
うくましきよ白らく思んのうちさえらく北
家うり乃る平家の流乃まんようらよ婦とく
みそ尊きなる君わかき乱う流りひくや
乃るハうつりま然にてをいりして脚もの代ハ
なふとのとも君ハよもえろし先されかし
世ハむかし藤平のしら相読将門なうち
らく帝王のりんさんよつく君後代りあ

おく波濤を凌ぎてハ人代君まこ下
野ゝ佐伯人わけ乃又太郎とつる童
若を法師生年十七歳小年ハしめ大事
よわふれし三七度いもうとふりくをはすか様
乃友を絶九月まて君よむかひまつり
てうはをなし先徳をあらはさんと神通を
照誠人そのしるしあらはすへしとて大
段入定後御説まてく八十そからも冥利

を入定後よ修しをき今日迄陳よをいそハ
うつゝふしてハ隣ゝ給入定後よ兄弟文
らんとくゝりて門乃内へ入り世尊入をわをらし
みく年来君らん出親をしてしくゝり
三万余諸菩薩大鏡一段よ由よゝら入り
乃徒し大鏡よせし衆ゝ水あつき風情すゝ
をうつしよみえしみくらみゝるる下の流をとゝ
叔離人へせしハあとまてれくされも出ちて

はかり侍く無ふ人郡為事まての河の東門よ
しき恵とよのともれむまや人御出し侍さうちの
つらきつむ水よなふきへ奉りすそれなり
なきこれ八百余騎になりきよりりたのなり
入道はかりつえよりりこ万余騎か鑁大
井かく俄かり給ハ文れ御前有つれともの三
百余騎を仲よりとめくつさふ三浦へ尼数
後ハ方やうあんかん出家よしなりとせとし

それまかいな無今日とう給りと思ふれハわき
とかふしを八ごさうりりわ志らく浄土寺神
經ハあうと居錦乃ひつきとよろしかもと出
しれまかいきて色も失徳か御がくひん会
文あふかふ候ハさ思さうりわ令す陸奥之判
文うを経ハと思ききれなすしれ出家よ火よと
志のよらわいよし罷居かふをさらくさうを
もあるるふう出家ふうりなる六条尓花人文字はさ

なへの郎當とも我もくと命をおしますして
なわれ石は文之乃ひさせ申しける然平家の大
将七兆より給ハる（つ）て文を乃えさん也
返合てけるによるほとふかゝ縁大事なり
負てふらをおなく宗に源をさうしておらん
ろ残かつされ左衛判友て敗七百余落て
逃然て供さ紀よおちる右ふに源忠文判
友厳とこそ乃き見るのふうこてく源氏志

花とりまよらいきうしろをいかさ紀りれ
将ゝ右ふうきこなしや返し合をあやさん
貴り里に給ハ気ハ文め讃紀よ返いるを
こゝえ給れと忘歟せ下ま斯先より為わ
鎌一六いまはりゝしや思ろん鞭身わい
ゟしてゝて十一歳うわりける也まれは敗
を引返しゝ十文字より為へてりそれを
中をおかくさ前と出したと一人もなし然

なかりけれハ三様より二様よきさん〳〵にきりう
ちらしけるうつ所をきらくさうく
いたりけれハ大の円形を収めさせて
さうしきるむやりよ志けるともさえつる
かゝるは次郎丸もくれたる太刀かり落るか
さしたへ〳〵続くおもちゐあらくさえへけり
けれとも志たゝかくこひをかけさりけるさ
つるか郎等あらわれくきらいの華をりを

うちみわたして二刀さしたりけれハ肉かた
もいさみまてよりたりけるに〳〵かくさうけ
く侍ハたまたゝかりける続くひを切
てかりの三位入道氣を急ぎす紛つかハ引
返をみて同じ所かたく辛き衣大勢さ
むくいへ〳〵逃れして歎わきさられ
手負をくさいこの名をんとうちそむけ
ゆへ入たけくてハ帰りし紀せい記そうしまし

とても七十にあまりては弓も力もよわし乃
身にをいては矢ゆるみしくなりて候へ
ども今ての人にはまさりたる矢おりて放
しめもうち給ひて矢すといふしなし矢は
前流しく弓力を出いくなりまかりける
ほどに右れ聞きかしすめわそのたつき給い
さ婦くわかまさを守まさり給へ八郎為なき
まりて手為流世流り殿へおへりよ給ふ

御曹司も父のために同じく此世をハ
出させけるところへ六条判官入道
おのおの人使をもて申けるは御所へ参
らせ参らせ候を見奉るはらくは給ひて
源為義判官殿もすでにきられ給ひぬ世
に御会所中さ給ふ候へ御かく御供仕
まつる使とや流かりしかりける八その後入
おんハかうこさ人ならせ思うて八郎為ともにを

弓矢いさきよくきこえしかいやんとしけるか家ひろ
然中より小硯をとりいたして流る敵なれし
らふかくそかきつけゝる
むかしより末の露さくらも明日よのならひ果て悲しき
此歌かきむすひ念仏とね申とも宿の
清きをそれなからもあそれなりさまは
なくなく七日まてふところにひとつらなりてふ
まれ生ひなからとさすらふかなしき

てんきうひ頼母しとて右勢さらし御座ありなかあ
流に入る右勢を然させて任意敵白宮らし
わろくすゝみ老れ後代乃物語まてありなん
すかそ老をかよしはしまへして念仏百遍を
くりよせて右力れさき紀をかゝるあそくらかまさ
かまゝて死よなりける後下総国住人下河
邊庄三郎よりてこひを見せて上の袖よ
つゝみくいまし紀殿の枝をつゝ文廻ありて

かくしてなわ御返事をみていかなるの事
給人源三郎がりへ○といふものをめして申く
むかしハ入道殿のたひと一命をまいらせてたゝ
こゝろを申てかゝるなり盛長をたひ給れく年
高院のうしろやまの御板をとらちくな
常入うり人にもしらせ後日に血のあまた
出うりなとのかくへをたらん眠ちくなん
御座を死人のたひ一かり御返事をさして

志りハ黄門とていまたわかく六条殿へ御門
まて三郎兵衛ともになさと失いけるかわり○
なし里かくすて小入道殿をも御返殿まいら
自害をし給ひ基通ハ御供いまゝ参らせ
こさんなれとて父子自害して終りにけり
大将軍ともに自害して候事ハ人なれとも
ものゝまゝ御中にもあふとふ以下かの
との若とめハ志りハいし川おち川ちりのこと

おもふなり下河邊のとものことをわすれこわりける
をみるおもはなり伊豆ちれにて伊豆の祐
人々四郎五郎とて兄弟ありけるとた
ちよなりて中よ勝にの事ハ大將なと
りし無事ありてそんひやうにけるか
ありわひるよ人く競いのましきよそよれにこうり
ありそうひをとさんとありまひなれハ待とも
すいさんよりよ乃おまなれよ競さなゝ心

愚く敵よとられ自害しるんとを一度もん
ち我ハ兄ましその我と思切く義さんよ者
ひとく敵わまこうらあくといして有りんく
語おちなれとも夫婦くハ宗根ありして乃おとこ
柱をこなそてよ試て命もおもしまはすくてつひ
なり二人此子ともへ可愛く三浦入道殿
を伊東殿も御自害候然とも中なれハ入道
殿よハ稚のつ文まいらせるといひけ六丁七

とやかつさ後いくとく作にかゝりたまへといさかてハ心
宮もし御心ひたゝ世にまかうたいよはう敷く
ことよもあらしとていくさ次ハ猶く仲さし
ぬこそておもとこ様よかへ立て寺をそ一丈
もよこへりける
君かあらは君かはとおほゆれは小母を治りよ名をは啓つ
といひしつハ自害せんとしけるか二人ながら
さも春乃ままよりつまゝく剣をかつてかく

かなよりておや子三騎にておちけるか栗子山
此方うけへを緒行ていかゝ思ひけんたふくいひ
けるは柳弓矢とるみの数ハ名をこそ惜め
宮わる三位入道殿一所にてうたれさせ給
ありつるに入道殿ハ年ふかくまてなりしかは
ハ然をかくひなくて命をこそ惜てける
よそうちもしけん後の名をもいかにそおもはん
とも同年せりて死よう希ひ申さいけくへり

かりともおもひかた〳〵しともおり候ていり
てさらハしらく入道殿よりのり文まいらせん
けふの原ハとく〳〵のり君無常流殿へまいら
る色しいまこそ女房のもしかへるかへる事ハ
いかなるさるべいとりてすへく身ひとつを
うすかりく無常流殿此れわりさま浅みて
てまいらせよ名残の後世をもとふらへとて
さらハせんとしられハ二人君子ともほの世

のふさらハせんと明丈なのりたまへさらんかはる子
ともに此命たうしなハんとこそのたまへしかて
思ひきりひとつかへりけるかいとくしくあて
水底ほしくおもゆるかいかもせんといひあ
きていくさふみ無き志川のもとうわさるとあはれん
ともく二人君子ともこなへはしすまきく水を
わすれて水底ほしきといひけるハさもと
さるあんとのはりこそ二人きんみさもちり

うりけるところよりおくにまゐらすまじく金佛
西邊ハかり只今へて腹わたあらはれて六十
二人若子をもたれしかば小川のわり弟兄
ところかく水流くみて御座ありしとなり
弟ハ六ろのちに流れさまよひくる川に
てわかれく水流しけるほどにかうとも
ちくハ六いしく六に御座ハ水流すむか
おのれ父かわしもふとりつまて夢てあし

まいらせわさされとも後来ままにわさは
もし力およばぬ次しくむかし犯父およびて犯
おもしてしたるいゑまても乃神に流みくなく
くおちゆくなるまでむかしたまひ思ひまん流
是大補ともしれぬところいふゆいしらし
て大なる犯人をさし犯みつふれかりて家い
まさ氣よはりて弱く成と思ひたまひとも
ハ海いりく御んさんに入屋とやけまハ流く

ともまむまるあつ残なまみしとて百人のり
むまよりおりくらく島を越さうてわうま
の院八大輔も力うちかりく百余人の中
へおわりくもし里入の道をかこ池中をお第
てさ刈とちるところをとしまえて河へ入く
水走りこ残くまむ人走こうしよ波おりあ
かる芸しろうち婦りよろいつきして抱おき
水をしらかしのりも力うち婦りて争取此殿

原ここ小菜まなんやいと海中てとくかつらし
うちかりく守れ乃こへうおちよかる文れ平島
院をおちさ婦へまひく おとこ山残りお海
そさまんひく二升走ん池をもとさをあひはけ
里花陣と流走ん衣なりす流乃とおれ婦まひ
く水まいりうておほしめさせのまし六おのかよ
小河なまるうりけ残くみくまつ婦うり
は雲をハ川くといふうつ文は河をハうふ河と

いふうと驚き給ふ事はゝかりに此色をハ心し
ろ乃井手たん言うれたる河と申河をハ水なし河と
申侍とはし事をさハ文うらる流れる給ひく
此しろ風姿みのる事小河毎して水なし河は流也ける
也くらもさま給事ひく見うる此の前は
うちとに渡り給ひける記さ乃ゑんらんるあ
うら文ねさ詑てを事ハ独とかくけ重は
年ふゆ落軍をハらうまてゝ文れ御流よ流

文くをいふけるほとふくもうらゑうら此れ色
居のまゝして追つまをうりらうるもとも也
矢まよいるほしふなうて是矢文乃御その波
よわうきて御むまりうら波よおちさを
ことひ也れめも御ちらへしおちゝもをろゝ
よさかさせ河しやまとおうちんとにひ給はれ
流ともよわりけるうさほと文よ思流まいて
ゆく御身ちうく很くりそけんかん衣よちるゝ独し

て志らまゝさせて三位入道ちかひさうれしむま
あかき康毛よう宗くりたる此むまにおほく
仲とも守しとて之をかへりたるとやかさん
むまよりおひおりく文をかへまいら場くわり
なれとも拘も御遣すして御いさ誂よ首わ
くろ九といふ仲ちうなん御むまより紀乃場
東なれともおかみかすさる几とおかさこさすてよせ
鋭くまて都されて判友鞍花さくわまくといひ入れ

ハらうふとも旅まさこあらわひさく文れ仲らひせ
江をんとすれよかくきん右力次拙さゆく
うらちうひくいひたる兵わこみ兵衛これ
ちんらんう為宮とみるハいふ詞うとう君
かくてわう場く事ふ文第くちんおまふい赤
むまよ家ふむりうきをハ下知するをもの年六
月なか十ト日春六年とえのくるといひ名主ハさみはや
せうとくらうたう十よ人へあらわひうりく

ちんをおとろかす中へとひ入てさん〳〵に切
まはるるほうしに思ひしか局目に入弟
子伊賀式部房七郎式部房かてし船ア庵主あん
走ゐけりて切てまりて命をおしますへ方
をこそり後かるこそふえて十よ人をうちとめ
みなうちとよりと河矢よいかるほとふかくさん
か見き役しを付かを見よい法師きしてかこし
さつゐくこう力を然丈とく見うま見の次あを

をちしこそりくたうら見さけくさ丈御とのこ
とりうる御わたふかくたうはこそりゐく
廻て休とのふまいるうとて恙かなり目に八
家伐ゆこ見虎中へたし里入くかさこさ六人う
ちとりてうら恙ふまて伊賀式部坊八人こそり房
く四人よ手おほせくなしみ方へうおもほる
此まきとよとろ九とうせまかりさて丈乃
御くひをハおさへう海にりくゐまいて帰てなり

ちは姫君しやう屋月いんにはにほん無漏法
ありとしいきとしあるにかへりける時法山
よこさまなるあつ孫のまつく思ひくかりあはせき
報しまゐらせんにかへしやう寺に八月いんをりて
いの里君所とせう終りの月いん廟をさ
よ子月こもりくむこんにかく大らん君のとく
考しかり七百日よわたる法流かうてんのにわ
このたびのさ給ひかるとしけんとうをりて

おりの後八月いんのりおほくのまかくありて里のかく無
漏法よみかりに法大事よ後ろくにかさ漏法を
もち忍の毎日にしよさことのかくこそ法をまたと後あ
りけるしいかにしきりとしも世よあわく八思しる
為しとそのひまんかるさかきとに發動ありと
すかたの里八月いんいでさるなまとくはまよは
もくもなよかり平家のはかくたち無漏法
代ともりてかなら里のこ言う帰らまるに云

治承のころ高倉院の御ときよもりくらゐたかくよ
はくにとる世中をわかまゝにしてはひとへん
君をなしそめんなまとくかのつらいのりれ
新かりむしかうもし菱のくんたちいもと
けりてうよへしもたしなかる律師僧ん
たかりとてかたん報恩孝養いまふにすそ
ありける
南都大仏三万余人のもんへまいるすてふせ

むちんは本はゆるてむかふ後陣たいまつ眞
福寺の南大門よわりかんとよくありなまゝとは毎の
りしくおゆしかさまのかもとも今は四十町
経坊のいひかるそうこれさせこなひかもそか
なしの後まさうし堂の日も御子也後は伽藍
まひく代をこゝしかすとてもかくゐるへきを
わすされましそなつしえいまゆる此東あわへぬ
やうかる光世さへの宿業うとおりふもあはれ也

文右衛門殿四郎兵衛とりかこまへにくうて一足さ
路にまよひぬと申えければ大しやうぐんもおい
きやうんはきさましよりすくてなんとみた
流れける坂より引立死よりけれ更も
乃ふきもまよはくて文の御とめにもえま
いりけれはすきつりけるか乃ちよはりこめ
ますてよせあらまはりせへるとおくて二井
池水みなこの乃さの水の中よつく華

敵城か負して わかて死ぬとりけるかなんはやう
ともの弟かふとふかりて屋わかれをはくいかう
とを晩くを路のわりさ宿おそろしなをはふ
そうさきかし文兵へさりとも今は末津山
けて路と自ひとくか坂かへはうしら路
出りんと思ひけるに浄衣きてゐる死人乃くひ
とをな死ととめうしよろこくかさそてとゆりける
をみまし八文の流もくるせ流れこよ

さて都へまゐりたれはさまさま都へまゐりたりと
たまいて都たれは御へてやしまさんと申され
をそいてさんとつくまいて都へやと思はれとも
さ渡かたしまも出てまた渡その後そ命をは
くわしくかりけることのくみとて有眼かあはれなる
御かえ返し流をかり此さえさかりなりけれは此後
元渡成立ふかくておかへさせんと入て申まて
御手道かるとそ乃ちはハ人くこうりあれ

俊大夫成卿は一く池の中に思をひいてゝ
あまりく家へ故よりなりひなれはいのちはかり
いきて又十まてよるかこゝなりけるか一品
元年に没落して経家大事にかりて非補せて
中けるは此孫の子為家定家は家隆の事
これ忠盛俊成卿の子也
さて定家卿まきれ俊成卿の後に入道以下
又十余人のくひをさらしあらん歎き

へ海へ車ぶわりさ海のもおてらまーをより
まさ入道せんらひとてわらうりけるハはるか
よりかほらひとそより海さうらひとてりうし
けるあはしく文の御さこかくさうらうしきの六
十よ人をもとい四十余人なり平家ぬくきよハ
よきいうをいましもをしかるもの七百よ人と
うちえし此文をつねよ人へおまいりけると
もなりけれハあるくしもも見さりまいて騒

とうるもの意なりもてもいまーんうかん立りま
いう騒らる定京中をさわさる後ハ典薬頭
定成朝臣そく宮の御なうれ侍御藤
治よまいりく兄さりまい騒へる人々中
夢さく定成朝臣をもとて尤きるへな
あそてわりけれハさるなり色代あくおほさかいく
兄中けるほとかくりく兄さりまいてせる
め膀をくろ探して夢もくんをもとい夢

八御くわんなりとまめく意をのまいん
て神祇仏によろしわてさまくとなれあ
きは一定御くわひとハきりよなりとしつ
かれちかけさまく御子をおいつましまき
そおろかなきす思召しける人也女房も宗
りくもこ一度見まんとおもひ逃ける人
さしれあろきたんおもりよ見まりなかく
よしかりけるまゝそとそおかえて心の中いう

そうりありあんとしそうう流くいとをを文ハ
御はまこをのもて揚総くすてよわや
うれもうつ揚くまひなるとさこあり胡にを
くまるるめいつそわり御たんめそいて流くひ
出しまいつそくその御ひてそう揚へ自ひよ
おり御かたるこみすみてそのおもくうけ総
りるかえさこなり胡佐ハいへるこ記いこ
い劍仏進ハ陳小衣く八さん色んも

てくりおり侍り